

# 園長先生の子育てひろば

令和8年2月

## 言葉の力

園長 堀田あけみ

帽山幼稚園長は、大学の教員が兼任しています。教育学部がでてからはそちらの教員が担当していましたが、私は例外的に外国語学部の教員です。というと、「何語担当ですか」とよく聞かれます。「日本語です」とお答えします。日本語と日本文化を知ることなく外国語を習得すると、往々にして起こるのが、日常会話以上の語学力に伸び悩むという現象です。ビジネスや研究に使える英語を習得できない…以前に、留学に行ったときに躊躇してしまいます。日本について訊かれたとき、答えられないと、そこから会話が発展しません。

バイリンガルという言葉は浸透しましたが、セミリンガルという言葉をご存知でしょうか。複数の言語を話したり聞いたりできるのですが、どちらも十分に発達していない状態のことです。言葉には二つの側面があります。認知発達の分野では、BICS と CALP と言われます。Basic Interpersonal Communicative Skills と Cognitive Academic Language Proficiency の略です。平たくいって、前者が会話力、後者が国語力です。

国語力とはなんでしょう。日本語教育と国語教育は違います。冒頭に挙げたエピソード、正確に言えば私は「国語としての日本語」担当となります。何が書かれているのかを理解するだけでなく、著者の言いたいことを書かれていない部分も含めて推測し、それを読んで感じたことを、言葉にして第三者に伝えることができるものが国語力です。なぜか、この話題で例に出されるのが「ごんぎつね」なので、他の例を探そうとしたのですが、一番わかりやすいので、やはり「ごんぎつね」にしましょう。主人公の兵十が狐のごんを殺した、というのが語義的な理解です。そこに至るまでに、どんなことがあったのか、銃を撃つ前と後で兵十の気持ちはどうに変化したのか、それはなぜかを理解する。そして、自分はどう感じたかを言語化する。こういったことが国語力になります。

外国語なんて現地に行けば、すぐに上達する、と言われるのは BICS の方で、一見、バイリンガルになっているようで、実は双方の CALP が不十分なセミリンガルになっている可能性があります。まずは、第一言語の CALP を確実にすることが、有効な第二言語の習得につながります。

言葉には「正しさ」「豊かさ」の軸があるので、「正しい日本語」を身につけると同時に、「豊かな言葉」を獲得できるよう、幼稚園では折に触れて紙芝居や絵本を読み聞かせています。一方的に聞かせるだけではありません。読み手の語りかけに聞き手が応え、同じ本でも読むたびに異なる経験ができます。どの子にもお気に入りの一冊があり、何度も読んで欲しがると思います。他の本も読もうよ、と言いたくなるかもしれません。でも、何度読んでも、反応は少しずつ異なっているはずです。子どもは同じ物語を繰り返し掘り下げることで、CALP を鍛えているのです。

豊かな言葉を育むのに一番のツールは日々のコミュニケーションです。意識して、家族の会話を持つようにしましょう。道を歩くときに、周りを見渡して、天気や虫や花の話をすれば、知識も増えて一石二鳥です。何より、楽しい気持ちになれるよう、心がけて。